

日・米大学生の作文におけるPARAGRAPH構成の差

三 浦 順 治

1. sentenceからtextへ

本論文では、sentenceを越えてtextとしての日本語と英語のparagraphの構成を検討し、日・米の大学生の書く説明文の構成と展開を比較しようとするものである。

数十年にわたり、耳や口による英語教育法（audiolingual methodology）の重視の結果、writingは軽視されてきた。しかし最近ではwritingの研究は応用言語学の主流の一部にもなっている。この変化の理由は幾つか考えられる。それは目標言語での読み書き（日本の場合は英語）のできる必要があるということへのますますの深い認識が出てきたことである。

さらに、従来日本の英語教育の関心は文法、sentence、語彙などにあり、教室での英語教育もっぱらこれらの知識の蓄積ということにあった。しかし、このところ新しいtrendが言語学に現れてきている。すなわちdiscourse analysis（談話分析）とかtext analysisとか呼ばれるものの研究である。

われわれが言葉を用いて思想を表出するときに、sentenceを孤立した形ではなく幾つかのsentenceが連続して構成されるdiscourse（談話）とかtextと呼ばれる形で使うのが普通である。しかしsentenceが連続していさえすれば談話なりtextなりという単位が成立するわけではない。たとえば有名な I came. I saw. I conquered. は全体として一つのまとまりをなし、textの形をなしていると言えようが、I died. I swam. I loved. はまとまりの単位をなすであろうか。言葉の話し手は、sentenceについてその文法性（grammaticality）を判断する能力があると同時に、sentenceレベルを超えたsentenceの集合性について、いわばその「text性」とでも言うべきものを判断する能力がある。語が結合してsentenceとなるためには文法上の規則が守られねばならない。同様に、sentenceレベルを超えて連続した、納得いくtextを構成するためには、やはりある条件が満たされていることになる。

text とdiscourseとは用語として必ずしもはっきりと区別されてはいない。text analysis, discourse analysis, written discourse analysisなどあり、それは話し言葉の分析なのか、書き言葉なのか、また相互に交換可能なのかについて幾つかの主張がある。本論文では、text analysisをwritten, not spoken, discourse analysisとして用い、textはsentence level よりも大きくcommunicativeな制約を持つものとする。すなわちそれは読み手と書き手がtextを理解し、また理解させようと働きあうプロセスに関わるものである。

2. ESL ライティングと対照レトリック

日本語のsentenceを英語にそのまま逐語的に翻訳するとなかなか英語らしくならない。和文英訳の難しい所以である。しかし問題は日本語から英語に直すという操作上のことだけなのか。

渡米の都度、知日のアメリカ人にインタビューして、日本人が英語のネイティブに対してどれほど説得力があるかを尋ねてきたが、その発言の幾つかを紹介する。彼らはアメリカ国内で日本に関しては影響力もあり、またほとんどの方は日本語もかなり堪能である。

The Japanese are unpersuasive to the Americans in written communication or in oral communication for language reasons. Even if the language is technically, completely correct, they don't really understand what persuasion strategies are or exactly how to phrase things properly. I would say that to Americans the Japanese are very unpersuasive. Books written by the Japanese, for example, are not persuasive; books written by Americans exactly on the same subject are much more persuasive to Americans because they know what it is that Americans are talking about or worrying about. Even the editorials of the major newspapers of Japan are not persuasive. In any communication, Americans tend toward speaking much more in terms of verbal communication content, whereas the Japanese tend to depend less on the total verbal communication content, so sometimes there can be a misunderstanding. The Japanese communication pattern is very difficult for Americans to understand because there is a difference in the expectation of the communication. (大学教授・社会学)

The Japanese are less persuasive; they do not give enough information to persuade. Unless they are highly sensitive to it, the indirect approach with the Americans will leave a tremendous number of gaps and a lack of understanding. Japanese indirection is quite a hard barrier. (大学教授・東アジア研究家)

The American tendency is to be specific, and the Japanese tendency is to be general... The Japanese are so much more polite than most people, and even though their asking is gentler, it is more effective. The Japanese are actually persuasive. One of the differences is that it appears that an American negotiating makes decisions on the spot and may be more likely to make decisions during the negotiation, while it seems that the Japanese desire is to go to the next person above in authority. The Japanese seem to be more circular. (大学教授・詩人)

In English they are less persuasive because they don't come to the point directly enough. The basic approach is to hide the point rather carefully and then expect the listener to find it. The written form is very fuzzy. To the American eye it is overly polite...I learned real patience from Japanese communication...we have to stop expecting the Japanese to be Americans. (大学教授・人類学)

Japan has an unspoken theory of communication. No one writes about it, but everyone understands.....It would be helpful if someone did begin to write down in articles or books or somewhere about the communication patterns of the Japanese, because we really don't know or understand much about their communication processes other than through observation. Even then we may make some wrong guesses about what is being said. (大学教授・Global Education)

It is my observation that Japanese industries have successfully mastered the techniques of marketing products in the United States. They have learned how to design cameras, electronic products, automobiles, computers and other high technology products to suit American tastes. What has surprised me is the people in the communication business in Japan have not learned how to do this. (財団のプログラム・ディレクター)

上の発言を要約してみると次のようになろう。

1. 英語のネイティブスピーカーにとって、日本人の書いたものは英語そのものは完全でも説得力がない。日本の主要な新聞の社説でもそうである。
2. 日本人は説得のためのstrategyを知らないし、そのための努力もしない。
3. 言葉でのコミュニケーションの分量が少なく、従って与える情報量も少ない。
4. アメリカ人は具体的に、はっきり言おうとするが、日本人は一般的、抽象的、間接的、fuzzyで、pointがはっきりしないので説得的でない。
5. 日本人は高度に技術的な製品を作り、世界市場に売り込むのに成功しているのに、日本のコミュニケーションの型はわからない。英語の話し手にはわからないコミュニケーションの型があるようだ。

日本人が彼らに対して説得力を欠くには幾つかの原因があるが、英語そのものが最大のバリアーである。それは日本人の作るsentenceと英語のネイティブのそれとの差である。しかしもっと大きくはsentenceを超えた単位、すなわちtextとしてのparagraphの構成の差である。最近文化を越えての情報の急速なネット化と文化の多様性への関心の高まりとともに、対照レトリックの研究が盛んになってきており、その結果、世界の言語のtextとしてのparagraphの構成や展開の仕方の違いが次第に明らかになってきている。

母国語で獲得されたコミュニケーションの型は、外国語の習得にあたって読み書きいずれにも強い力を持つ。日本人の英語のライティングでもこの力がnegativeなマイナス転移を示すことになる。従って説得力ある英語を書きうるようになるためには、いずれかの段階で意図的に英語のparagraphの展開の型を教えてライティングの練習をさせることが必要である。

3. 段落、paragraphそして転移の予測

この章では日本語の段落と英語のパラグラフの特質を概観し、日本語話者が英語のparagraphを書く場合の、転移の予測を試みる。

3.1. paragraphの構成とサイズ

英語の「paragraph」は日本語の「段落」と同じものなのか。「段落」「パラグラフ」「paragraph」は辞書では次のように定義されている。

段落： 長い文章中の大きな切れ目。段。(『広辞苑』)

パラグラフ： 文章上の節。段落。(同上)

paragraph: 段落、文節、パラグラフ《文章の一区切り》(研究社『新英和大辞典』)

paragraph: A distinct subdivision of a discourse, chapter, or writing. (Webster's New Collegiate Dictionary)

これらの定義を見る限り日本語の辞書では「パラグラフ」＝「段落」ととっているようにみえ

る。しかし実際には、一般の文章論ではこの二つの用語がat randomに使われている。また日本の学校の教科書には「パラグラフ」は見当たらず「段落」だけが使われている。

次に「段落」の定義の幾つかを取り上げ、英語の「paragraph」と比較してみよう。

一つの段落を書くには、次のような方法がある。まず、中心となる事柄(要点)を一つか二つの文で書き表す。次に、その内容はどんなことなのか、なぜそうなるのか、それにはどんな事実があるのかなどをくわしく書いていく。(『国語I』光村図書)

本章で最も重要な概念は「段落」である。昭和二十年代まで、我々は論理的文章を書く必要性はきわめて少なかった。そのため、文章の構造の知識は乏しく、構成の原理についても知るところはわずかであった。まして段落が文章の論理を構成する一つの単位を成していると気づく人は決して多くはなかった。……一段落は一つの要点を核としてまとまっていることを理解する、これがまず第一のねらいである。一段落一要点という段落の本質がわかったら、今度は逆に、要点以外の部分は段落において、どのような役割をはたしているか、を考えさせる。……(『国語表現教授資料』光村図書)

具体的にはどのような個所で段を区切るのでしょうか。極端に言うと、だいたい長く書いたからこの辺で切るかといった軽い気持ちで改行する場合もある。一般には、原稿用紙で5～10、すなわち100～200字、3～5文程度で切るのが大体の目安であろう。しかし、段落は本来意味の区切りを示すものであるから、そのような量的な基準よりも、表現内容を重視すべきである。(『国語表現』明治書院)

文章が、主題に従って一貫した意味を表現するため線状的に展開していく経路には、起伏曲折があり、それに応じて文章は幾つかの区切れを持つ。この区切れは、文章を構成する部分として、文章全体の主題につながる小主題をもってまとまっている。この意味上首尾一貫した一つの統一体としての文集合を段落という。……アメリカの多くの作文教科書では、……一段落に二つ以上のトピックを盛り込んではいないと教えている。(『国語学研究辞典』明治書院)

これら「段落」の説明は、後述する英語の「paragraph」と内容はほぼ同じではあるが、筆者下線のように首を傾げさせられる個所もあるし、英語の定義よりもよりも漠然としている。「段落」という用語自体への反論もまたある。

わが国では適当な訳語もなく、またあまり重要視されてもいないけれども、^{スピーチ}語り、^{ライティング}もの書きのレトリックにおいて非常に大切なのはパラグラフであります。日本ではパラグラフの構成単位である文章が異常なほどに重視されるのに対し、パラグラフ自体は普通段落と呼ばれ、ひとつの改行個所と次の改行個所の区切り位にしか考えられていないので、論文書きの指南書ではほとんど完全に無視されています。しかし、国際的に通用する論文レトリックで文章に優るとも劣らぬ重要性を認められているのは文段^{パラグラフ}です。(澤田昭夫『論文のレトリック』)

パラグラフの重要性を強調する板坂氏でさえもパラグラフを段落と訳しておられる。段落とは本

来「切れ目」のことである。漢語では段または節といわれ、段落とは区別される。(澤田昭夫『論文のレトリック』)

英語ではparagraphを次のように定義する。

A paragraph is a series of sentences that develops one topic in a clear, forceful, and interesting manner. Like all compositions it has a beginning, a middle, and often a conclusion or summary sentences.

The form of the paragraph is unbroken. The first line is indented. The next lines follow, without any blank spaces, to the end of the paragraph. (Donald K. Shults & Yasuo Hashiguchi, *Writing in English*)

A paragraph consists of a group of sentences that discusses a single subject. It usually begins with a main idea sentence that introduces the subject and is followed by two to six sentences that add information about the subject. (Sandra Seltzer et. al., *Writing*)

日本語の段落は古来論理的な単位ではなく、息継ぎのための物理的な単位であった。それは昭和20年代以降戦後になってはじめて論理的単位として理解されるようになったものである。「パラグラフ」という用語は前述のように日本の教科書にはなく、すべて「段落」である。従って、「段落」には二つの解釈、すなわち息継ぎとしての物理的段落とparagraphを意味する論理的段落とが日本語には存在するのではないか。その定義ものんびりして厳格でない。英語の定義ははるかに厳密である。

英語と日本語のparagraphがどんなに違うかについて外山滋比古氏と林四郎氏は言う。

彼ら(英米人)のパラグラフはレンガのようなものだ。それは堅固で、密度があり、いくらでも垂直に重ねることができる。これに対して日本人の古来いだいてきているパラグラフはレンガのような堅さと明確な形を持たず、やわらかいのが特色で豆腐のような単位だ。積み重ねたら崩れる。いくらでも小さく切っていける。(外山滋比古『日本語の素顔』)

西洋系の文章は鉄筋コンクリートの鉄骨のようにがっちりしている。これに対して日本のは骨ぐみ型ではなくて、他人とパーソナルにやり取りしながらその場を面白く展開していく話術である。(林四郎『言語生活』9月号)

日本人留学生のライティングの調査をしたBurtoffは3つの特徴を上げているが、その第一の特徴としてtopic sentenceすなわちgeneralizationを最後に持つてくることを取り上げている。

Japanese subjects preferred to end texts and/or segments of information in a text with a generalization; moreover, these generalizations usually overlapped with (or referred back to) a previously occurring explanation, creating neat segments or units of information. (Burtoff, Michele J., *The Logical Organization of Written*

…)

日・米学生の書いたparagraphでのtopic sentenceの位置については、次のような報告もある。34人の日本人学生と16人のアメリカ人学生に題を与えて英語の作文を課し、出来上がった文をばらばらに切り離し、日本人のをアメリカ人に、アメリカ人のを日本人に並べ替えさせた。その結果わかったことは、topic sentence をアメリカ人学生は全員最初に、日本人学生は最後に移したという。(Iwasaki, Masami and Keiko Hayasaka. Unique Logic Patterns Found in English Compositions Written by Japanese Students. *Speech Education* vol. XI)

事実、日本人留学生はWritingのコースで苦勞するわけで、とりわけparagraphに関する注意を多く受ける。Indent! No new paragraph necessary. You need a topic sentence as a foundation for the paragraph. The topic sentence doesn't really relate to the rest of your paragraph. This is your thesis idea. Bring it earlier. などである。本調査の日学生のparagraphでもこの点にも留意したい。

paragraphのサイズ

文段の長さは決まってはいません。あまり短くもあまり長くもしないことが大切です。…扱うことがらが複雑な場合は当然一文段の文章の数も語数も増えるでしょう。逆に報道記事的論文では一文段はかなり短くなるでしょう（対話の引用の場合は、話し手が変わるたびに「はい」という一語でも改行して段を変えます）。変わらないのは一段一思想という原則です。(澤田昭夫『論文のレトリック』)

一般には、原稿用紙で5～10行、すなわち100～200字、3～5文程度で切るのが大体の目安であろう。(『国語表現』明治書院)

Paragraph length, though in itself perhaps not supremely important, is in a sense a by-product of paragraph organization and content. In college composition classes the general limits of the paragraph are often defined as ranging between one hundred and three hundred words; newspaper style-books generally place the maximum limit of the paragraph at one hundred words and the average at sixty or thereabouts.

Our conclusion, then is that paragraph length is extremely variable, depending upon the kind of material that is written and the medium in which it appears. (Albert H. Marckwardt and Frederic G. Cassidy, *SCRIBNER HANDBOOK OF ENGLISH*.)

paragraphの長さは英語でも日本語でも当然ながら多様である。内容が複雑であればparagraphは長くなる傾向がある。個人差もまたある。高校生用『国語表現』では段落当たり3～5文を目安に書けという。日本の大学で日本語の作文のコースを開講しているのは極めてすくない。訓練を受けない日本人学生は重文、複文、混文など複数のT-unitの混在するsentenceを書き、長くて複雑でわかりにくい長文のparagraphにする傾向がある。

アメリカの大学で学生には必修となっているWritingのコースでは、Sentence CombiningとかFree Modifierの使用などを加えた作文の指導を受ける。これによってsentenceを長く書くよ

うにはなるが、それはT-unitをひとつだけでも理解のしやすい文である。アメリカのすぐれた大人の書くparagraphは平均10文くらいと伝統的なもの書きの本には定義されている。但し英語のparagraphは最近では短くなってきており、新聞の記事などは平均3文程度と言われている。それでも一般に日本の学校で勤めるparagraphよりはかなり長い。

3.2. topic sentence の存在とsupporting details

topic sentenceは日本語ではトピックセンテンス、中心文、小主題文などといわれる。またsupporting detailsは補強、サポート文、支持文、展開部の文などといわれるが、まだ安定した用語にはなっていないようである。また手元の高校の教科書では、topic sentenceについての説明はみられるが、supporting detailsに関する説明はとくに見当たらない。

高校の『国語表現』でのtopic sentenceの説明は次の通りである。

段落は一つの小主題を含む一まとまりの表現である。(『国語表現』明治書院)

段落の内容をわかりやすく読み手に伝えるためには、段落の初めや終わりなどに、トピックセンテンスを置くという方法がある。トピックセンテンスとは、その段落の中心的内容をはっきりとまとめて述べた文のことで、中心文などとも呼ばれる。トピックセンテンスを、意見文や説明文などの段落に適切に示すようにすれば、読み手が段落の内容を理解するうえで、非常に有効である。(『国語表現』第一学習社)

『国語学研究事典』(明治書院)では「段落」の項に「アメリカの多くの作文教科書では、一段落には一つのトピックセンテンスがあって、これを中心として一つのトピック(話題)が述べられ、一段落に二つ以上のトピックを盛り込んではいないと教えている。」とあり、日本文ではどうなのかはぜんぜん述べていない。さらに、トピックセンテンスの数について次のように述べるのもある。

市川孝氏は「ところで、段落の内部に、中心文の認められることがある。…中心文は、どの段落にもあるとは限らないが、その反面、一つの段落に、二つ(以上)の中心文の含まれることもある」と書いており、英語の文章論がいうパラグラフとトピック文の関係よりゆるい感じをうける。(三浦順治『新英文構成法』開隆堂)

英語ではtopic sentenceを次のように定義し、またparagraphの中での位置についても述べる。

The topic of a paragraph should be stated in a single sentence somewhere in the paragraph. This sentence is the topic sentence. In general, the topic sentence is placed at or near the beginning of the paragraph. You have noticed that this arrangement is used frequently in newspaper and magazine articles. At the beginning of a paragraph the topic sentence immediately attracts the attention of the reader and tells him what to expect. The topic sentence is not always placed at the beginning of the paragraph;

sometimes it comes in the middle or at the end to state a conclusion or reinforce a point. (Donald K. Shultz & Yasuo Hashiguchi. *Writing in English*)

そのように訓練されていない場合にはtopic sentenceは最後にもって来るのが普遍的なものといわれる。英語ではおよそ85%のparagraphでtopic sentenceは最初に来るといわれている。日本人学生も訓練を受けていない場合には、その位置は最後になることが予想される。さら bathtub pattern (三浦)といわれる日本文のparagraphでのtopic sentenceのはっきりしない書き方についても本論文では検証したい。

supporting details について言えば、Hindsは日本の新聞では「内容を知りうる前に余分な油が取り除かれなければならないという点で、tempuraに類似する」スタイルだと主張している。これは日本の新聞ではしっかりとしたsupporting detailsがtopic sentenceを支えていないで、redundantなsentenceが入り込んでいるということである。

英語ではsupporting detailsがtopic sentenceを言い残すことなく説明することになっている。これに対して、例えば日本の作家に大きい影響を与えた谷崎潤一郎は「この読本は始めから終りまで、含蓄の一事を説いているのだと申してよいのであります。」として、「饒舌を慎むこと」「あまりはっきりさせようとせぬこと」「意味のつながりに間隙をおくこと」(谷崎潤一郎『文章読本』)を説いている。

さらにUlla Connor (*Contrastive Rhetoric*) は読み手責任と書き手責任に基づく文体にふれて、日本のwritingは読み手に要求する部分が多く、西欧で好まれるレトリックの型は説明の責任を書き手に置く、といい、日・米の学生の書くparagraphではこの点どのようであるのかも注意したい。

3.3. unity

ただ一つの目的を持って書かれたparagraph、それがunity (統一性)のあるparagraphである。unityを持たせること、これは英語の作文の練習では欠かせないことになっている。これによってparagraphからredundantな部分がなくなり焦点のはっきりしたものになるからである。英語ではunityは次のように定義する。

When a paragraph has unity, it states only a single thought. A unified paragraph presents only one topic or one part of a topic. All the facts, examples, and details in the paragraph should explain this topic. (Robert G. Bander. *From Sentence to Paragraph*)

日本の文章論ではこれをどう取り上げているだろう。高校の教科書でunityを取り上げているのは見当たらない。高校教科書外では最近の大学生用英作文の教科書などに簡単に触れられはじめている。(大井恭子他『Writing Power』; 木下是雄『理科系の作文技術』) paragraph構成の訓練をうけてきていない大学生はtopic sentenceの有無にも無頓着であり、ましてunityに配慮したsupporting detailsを書くことはないであろう。redundantな文を書き連ねることが予想される。

3.4. coherence

topic sentence でparagraphの統一のアイデアが示されたら、次に考えなければならないのは文と文の自然で淀みないつながりである。この「つながり」がcoherenceである。

『国語表現』には次のように説明しているが、英語の定義に見られるようには、topic sentence との関連については何も述べられていない。「つながり」の説明のない教科書もある。

段落内部の文と文を適切につなぐ。すっきりと筋が通るように、前後の関係をよく考えて、文脈を展開させる。理解しやすくするために、長い文を避けて短めの文に区切り、必要に応じて、適切な接続語句や指示語を使って、前後をつなぐ。(第一学習社)

Coherence is the straight line of development within a paragraph or composition. An English paragraph is coherent when its ideas are clearly related to each other in an orderly sequence. Each sentence in a coherent paragraph naturally grows out of each earlier sentence in developing the central idea. (Robert G. Bander. *From Sentence to Paragraph*)

日本人学生は並列の接続語、すなわち「AND」の相当語（～て、そして、また など）を用いて長いセンテンスを好んで書く。この結果topic sentenceとの関連は薄くなり、流れはtopic sentenceとではなく、前後の文との関わりの強いものになる。

4. 調査

この調査は日本人大学生とアメリカ人大学生の書くレポートのparagraphの構成の違いを探るためのものである。日本人学生は秋田大学教育学部英語科4年生（1994年）15名で、レポートは日本語で書かれ、題は「コミュニケーション育成のための英語教育」である。アメリカ人学生はミネソタ州立セントクラウド大学3年生（1995年）15名（日本人留学生1、パキスタン人留学生1を含む）で、内容は日本文化の一つを取り上げて説明するTAKEHOME FINALで英文でのレポートである。日本語・英語それぞれ25ずつのparagraphをat randomに取り上げて分析し、前節で取り上げた日米学生のparagraph構成への予測との違いを検討した。

4.1. 一つのparagraph内のsentenceの数とT-unitの数

paragraph当たりのsentenceの数

日	4.32
米	4.76

見た目のsentenceの数、すなわち日本語では最初の文字から句点まで、そして英語では大文字で始まってピリオドまででは、1 paragraph当たりのsentenceの数はほとんど同じである。しかし次に示すように、sentenceの構造が異なるのでその数だけでは論じられない。

paragraph当たりのT-unitの数

日	7.16
米	5.40

sentenceの長さは日・米の差は殆どないが、その構造にはかなりの差がある。米学生のsentence

は単文と複文でまとめようとしているのに、日学生はAND、BUTおよびその相当語句を多用している。日学生のparagraphが分かりにくいのは、特に並列のANDとその相当語句の多用により焦点がぼやけていることと、逆説のBUTによる流れの変更である。

4.2. topic sentenceの存在とsupporting details

topic sentenceの有無

	有り	無し	(複数)
日	17	8	1
米	24	1	0

米学生のparagraphにはすべてtopic sentenceがある（置いてない1は日留学生のものである）。米学生は一年次にライティングが必修でparagraph構成とかtopic sentenceを置くことの練習をさせられている。一方、日学生は高校では、特に普通高校では、ライティングを教える『国語表現』は殆ど採用していない。センター試験に国語表現は入っていない。

topic sentence の長さ

日	14.29文節（語数換算でおよそ19,29語）
米	17.0語

内容により、また個人によりかなりの差が認められる。一般に米学生のほうがtopic sentenceを短く書き、日学生では重文も見られる。

topic sentenceの文の種類 (%)

	単文	重文	複文	重文+複文
日	41.2	5.9	23.5	29.4
米	66.7	0	25.0	8.3

日学生は米学生よりも重文および重文+複文をかなり多く書く。重文は焦点をぼやけさせる。特にtopic sentenceが重文である場合にはそのparagraphの統一性がおおいに損ねられる。米学生は重文を避けようとしていることがわかる。この、topic sentenceの種類の違いが、日米の学生のparagraphの明晰さに大きい影響をもつ。

topic sentenceの位置

	前	中	後	前・中
日	17のうち15	1	0	1
米	24のうち24	0	0	0

対象とした25のparagraphのうち、topic sentenceのないのが日8、米1である。実に日学生の3分の1強がtopic sentenceなしのparagraphを書いている。またtopic sentenceを置いた日学生のものについては、paragraphの尾位置に持ってくると予想されたが、米学生と同様にほとんどが頭位置に置いているのは予想外であった。

4.3. unity

topic sentence をsupportする文と余分な文 (%)

	support するT-unit	redundantなT-unit
日	76.7	23.3
米	97.8	2.2

topic sentenceのあるparagraphについてみると、日学生のもの23%がtopic sentenceと関係ない、余分な逸脱したdetailを書いていることになる。ちなみに米学生の2.2は日本人留学生のものである。調査した米学生の資料ではtopic sentenceから逸脱したsentenceは皆無であった。

supporting sentence のspecifics

	実例	統計	引用	類比	対照	原因	理由	結果	定義	who	what
日	0	0	14	5	4	5	6	7	8	6	1
米	16	1	4	7	21	7	0	14	4	0	0

	how	why	単なる陳述	漠然とした感想
日	4	1	14	12
米	0	0	25	0

これはtopic sentenceをサポートするために何に頼っているかを見るためのものである。日学生は実例を取り上げたのが0であるのに、米学生は16例あり、具体例をあげて説得しようとしている。米学生は統計に頼ると思っていたがこの調査では1に過ぎなかった。日学生も0である。引用と定義の多いのが日学生で、外の権威に頼ろうとする傾向が米学生よりも大きい。類似したものを較べるのが類比（comparison）で異なったものを較べるのが対照（contrast）である。米学生は異なったことを取り上げて際立たせる対照のテクニックをはるかに好む。日学生は「誰が」「何を」「どのように」「なぜ」などの疑問文が多い。米学生はひたすらtopic sentenceを説明し、疑問を解明しようとする。日学生は、「～と思う、だろう、考えてみたい、ようである、気がする」などの思いを文末につけるが、「I think...」を使った米学生は0であった。

4.4. coherenceのdevice

coherenceのための単語の言い換えはどちらのグループにもなかったし、they, thusなどth-語が英語では実に多いのに対して、日本語では予想されたとおり「この」とか「それ」など実語が多く使われ、また代名詞単独の使用は極めて少なかった。

特徴的であるのは、両言語のAND,BUTの使用頻度とそのdeviceである。

	ANDと相当表現の頻度	BUTと相当表現の頻度
日	50	10
米	5	4

「ANDとその相当表現」での接続の頻度の高いことが日学生の文の目立つ特徴である。日学生は多くの「また」「そして」「そこで」を、さらに並行表現の接続である「～であり」「し」「させ」の類を米学生の10倍の頻度で使用している。一見長くみえる日本文は実は並列された短文の集合である。

AND表現50例中10例ある「また」「そして」「そこで」などの並列語の多用は読んで目立ち、くどい感じを与える。英語においてもそうである。しかし50例中40例もあった「～であり」「～し」「～させ」などの並列表現は目立つことなく文を長くする。

この接続の表現は4つの種類に要約できよう。

1. 「～する目標であるが、これを端的に言えば」のようにがで接続するもの。2例ある。
2. 「～であり」「話したり」「反論し」のように（子音）+iで接続するもの。19例で一番多い。
3. 「～ではなく」「高く」のように子音+uで接続するもので、3例ある。

4. 「持たせ」「向けて」のように(子音)+eで接続するもの。16例ある。

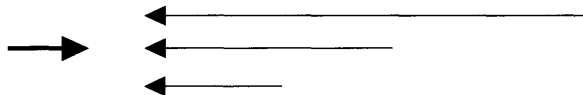
接続のもう一つの特徴は日学生に逆接の「BUTとその相当語」の使用が多いことである。米学生のレポートが読むと流れるのに、日学生のがそうでないことの原因の一つはこの「しかし」の存在である。特に一つのparagraphに複数の「BUT」があるとき思考の流れは著しく阻害される。これはANDの多用よりもはるかに大きい障害である。

5. 日本語と英語のparagraphの型の違いは即ちsentenceの型の違いである

第二言語習得においての中間言語転移(interlanguage transfer)が論議されている。(Ulla Connor, Contrastive Rhetoric) これは日本語使用者について言えば、英語を外国語として習得する場合母国語である日本語の言語特性が、習得対象語である英語にさまざまなレベルで転移するということである。今回の私の調査からparagraphの構成でも日本語からの転移が大きいことが、そしてそれはsentenceの構造に由来することが知られた。

英語

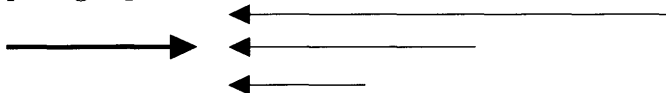
sentence



SVO、 修飾語群、修飾語群、修飾語群、……

(例) They came home disgusted from their fishing trip, their clothes soaked, their bones chilled, their hands empty. (Bonniejean Christensen, *The Christensen Method*)

paragraph



topic sentence, support, support, support, ……

(例) A bus driver must answer questions while guiding a bus through heavy traffic
All day long the driver answers the same questions without becoming angry. Every few minutes a bus driver has to ask passengers to step to the rear of the bus. In spite of traffic snarls and thoughtless passengers who cause delays, a bus driver is expected to cover his or her route on schedule. (Robert G. Bander, *From Sentence to Paragraph*)

英語のsentenceではmain ideaを表す主節(main clause)が頭位置にきて、次に修飾語群が右へ伸びていく。しかしそれらはすべて主節を左方修飾する。paragraphにおいても同じことが見られ、general statementであるtopic sentenceが頭位置にきて、次にsupportする文が右へ伸びていくが、それはいつでも左方のtopic sentenceを説明する、というのがもっとも一般的な展開である。

日本語

sentence

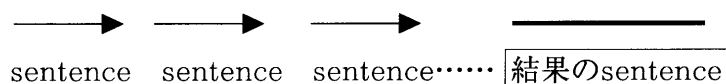


T-unit + AND相当表現 + T-unit + AND相当表現 + T-unit + AND相当表現 + 主T-unit

(例) どういう効果をねらって、どんな姿勢で文章を書くか、このような題材をどういう順に配列し、どうつなぎ、どこに力点を置いて述べるか、各部分にどの程度の分量を割り当てどのように書き起こし、どう結ぶかなど、**全体計画を考えて骨格を作るのが構想である。**

(『国語表現』明治書院)

paragraph



(例) 人間の目に盲点があることは、誰でも知っている。しかし人類にも盲点があることは、あまり人は知らないようである。卵が立たないと思うくらいの盲点は、大したことではない。しかしこれと同じようなことが、いろいろな方面にありそうである。**そして人間の歴史が、そういう**
瑣細な盲点のために著しく左右されるようなこともありそうである。

(『国語表現』明治書院)

調査した米学生のparagraphの100%がtopic sentenceを頭に持ってきているのに対して、日学生の場合は60%であった。この日学生の数値は調査前の予想よりも大きい数値であった。

一見長く見える日本語sentenceは、実はAND相当表現で連結された、短いT-unitの連鎖であり、連鎖の右方の尾位置に「主T-unit」が来る。paragraphの構成もまったく同様に、sentenceの連鎖の右方にまとめの「結果のsentence」が来る。

英語のSVO、日本語のSOVの語順のうち、SOV型は左枝分かれ(left-branching)言語、英語に属するSVO型は(right-branching)言語である。Yngveは、心理学のなした測定を援用して、枝分かれの接点の数すなわち深さは人間の即時記憶(immediate memory)に大きな影響をもつという論を展開している。すなわち左枝分かれでは接点を一つ経るごとに記憶の指数は一つずつ増える、つまり深さが増して負担が増えていく。そして実際に一度に理解し、記憶し、繰り返すことのできるitemは一定の数を越えることはなく $<7 \pm 2>$ であるという。右枝分かれの構造ではこのような制限はない。右枝分かれの英語のセンテンスは長くても理解可能なのに、左枝分かれの日本語センテンスが短いT-unitの連鎖にしなければならない理由がここにある。(日本語・英語のbranchingについての詳細は(三浦順治「日本語・英語のセンテンスの長さ」『秋田英語英文学』第37号、平7)を参照してください。)

6. まとめと英語のexpectationにかなうparagraph writingへの示唆

本論文では日・米の大学生の書く説明文でのparagraphの構造上の違いを取り上げた。著者の関心は学生にいかん英語のexpectationにかなうparagraphを書かせるかであり、その観点から資料の解釈を試みた。それは①paragraphの大きさ②topic sentenceとその周囲③統一性を示すunity④sentenceの関連をあらわすcoherenceについての比較である。

まずparagraphの大きさについていうと、sentenceの数は日米大差はないが、T-unit数では日学生が多く、これはANDとその相当表現で結んで短文を連鎖させているためである。短文の多用は英語では構造的には未熟な文の特徴と言われ、和文英訳の際に留意しなければならないことである。

つぎに日学生にtopic sentenceの欠如したparagraphが多い。米学生は単文を用いて簡明なtopic sentenceを書き、日学生は重文と重文+複文が見られ焦点がぼける。位置は米学生はすべてparagraphの頭位置に、日学生はtopic sentenceのあるものについては88%が頭位置に置いて

いる。ただし米学生にあつては100%あるtopic sentenceが日学生にあつては32%のparagraphにtopic sentenceがないという事実は重要である。

topic sentenceという中心話題が逸脱なくどれほどsupportされているかについては、米学生は逸脱ゼロに対して日学生は逸脱した余分な不必要なsupport文が全体の23%強にのぼる。またsupportに米学生は実例を多くあげ断定的で、さらに対照により際立たせようとする。それに対して、日学生は引用と定義が多く外の権威に頼る傾向がみられ、また疑問文が多いのも特徴的である。

paragraphのなかの流れをどう繋いでいくかについては、日学生は米学生の10倍のANDおよびその相当表現を使用する。さらにBUTの使用も多く、これが思考のスムーズな流れを阻害している。

日本人学生による日本語での説明文と、アメリカ人学生による英語での説明文で、paragraphの構成に関して両者の間にどのような違いがあるかをわれわれは知った。paragraphに見られる日本語と英語の違いは、実はsentenceでの違いと同じであることを見た。この、sentenceの構成の違いは、そしてparagraphの違いは二つの言語使用者の思考の型の違いかもしれない。

第2言語を使用する場合には必ず第1言語からの転移があるといわれる。(Ulla Connor, *Contrastive Rhetoric*) 日本人学生が英文を書く際にもこれまで見てきたことがマイナス転移をすることが考えられる。その結果それは英語話者のexpectationに沿わない説得力のないものとなる。これからも進むグローバル化を考えると、対照レトリックをも視野に入れたwritingの指導が必要になろう。

References

- 『広辞苑』岩波書店、昭46
『新英和大辞典』 研究社 昭57
『国語学研究事典』明治書院 昭58
Webster's New Collegiate Dictionary 1958
- Bander, Robert G. *From Sentence to Paragraph*. Holt Reinhart. 1985
Burtoff, Michele J. *The Logical Organization of Written ...*, UMI Dissertation Services, 1983
Christensen, Bonniejean. *The Christensen Method*, Harper & Row, 1979
Connor, Ulla. *Contrastive Rhetoric*. Cambridge. 1996
Iwasaki, Masami and Keiko Hayasaka. "Unique Logic Patterns Found in English Compositions Written by Japanese Students." *Speech Education* vol. XI. 1983.
Marckwardt, Albert H. and Frederic G. Cassidy. *SCRIBNER HANDBOOK OF*
Seltzer, Sandra et. al. *Writing*. New York. MacMillan. 1979
Shults, Donald K. & Yasuo Hashiguchi. *Writing in English*. The Eihosha LTD. 1986
Yngve, Victor H. "A Model and a Hypothesis for Language Structure." *Proceedings of the American Philosophical Society* 104, 1960

大井恭子他『Writing Power』研究社 平成9
木下是雄『理科系の作文技術』中央公論 昭56
澤田昭夫『論文のレトリック』講談社 昭58
第一学習社『国語表現』平成5
谷崎潤一郎『文章読本』中央公論社 昭50
外山滋比古『日本語の素顔』中央公論社 昭56
林四郎『言語生活』9月号、筑摩書房 昭59
三浦順治『新英文構成法』開隆堂 昭62
三浦順治「日本語・英語のセンテンスの長さ」『秋田英語英文学』第37号 平7
光村図書『国語I』昭62
光村図書『国語表現教授資料』昭58
明治書院『国語表現』平成5

Abstract

This paper attempts to compare the organizational differences of paragraphs in expository essays written in Japanese by Japanese university students and those written in English by American university students.

This analysis concludes

1. that there is not much difference in the number of sentences per paragraph, but that Japanese students incorporate more AND-equivalent connectives into sentences, a factor which tends to blur the focus of the sentences.
2. that 32% of Japanese paragraphs did not have topic sentences and that those that had topic sentences took the initial position, not the final position, contrary to my expectation. American students write simple topic sentences, and Japanese students tend to write compound topic sentences.
3. that 23% of the sentences in the paragraph in the Japanese essays did not support the topic sentence directly.
4. that American students use examples, assert their opinions directly, and include more contrastive evidence than the Japanese students. However, Japanese students tend to cite authorities and use more quotations, definitions, and interrogative sentences than the American students.
5. that Japanese students tend to overuse coordinating conjunctions like AND and its equivalents, following the expected pattern of Japanese sentence structure. They also use the disjunctive BUT to a lesser degree. However, the multiple repetition of BUT tended to hinder the smooth flow of thought that they were striving to achieve in the paragraph.
6. that the sentences and paragraphs of both languages use a base and then develop it. However, the development of details are exactly opposite in that English typically uses right-branching development while Japanese uses left-branching development.
7. that culture-specific differences account for the wide range of disparity present

in the essays by American students and Japanese students. Finally, we must utilize a contrastive educational method in order for Japanese university students to attain rhetorical maturity in sentence development and paragraph form.